

「ラブリットのもとに苦しみを受ける」

神話記21：22〜23

ヨハネ19：1〜16

(1)

「使徒信条」は、2世紀から3世紀をかけて現在のものに整えられました。2000年も前の長き間、多くの教会は使徒信条を告白してきたのですが、そのたびに不思議に思われることは、主は聖霊にのみりてやどり、処女マリヤより生まれ「に続へ」その後です、主イエスの公生涯を省略して、いきなり「ポンテオ・ピラットのもとに苦しみを受ける」に続へてゆきます。

2000年もの間、礼拝の度に「主イエスは（ポンテオ・ピラットのもとに苦しみを受ける」と告白されてきたのですから、ピラットにすればこれほど迷惑な話はないかもしれません。

しかし、どんなにピラットにはお気の毒であったとしても、「ピラットのもとで、イエス・キリストが苦しみを受けた」という事実は変わりありません。主イエスが強盗に襲われて殺されたとか、崖から突き落とされて死んだとか、暴徒の反乱に巻き込まれて死んだというではありません。まぎれもなく、主イエスはユダヤの地方総督・ポンテオ・ピラットのもとに十字架の苦しみを受けたのです。

それにしても、使徒信条の中に「何故、ピラット」という世俗的匂いのする地方総督の

名が残ることになったのでしょうか。

ある方は、これは「綺麗な部屋に一匹の犬が紛れ込んだようなものだ」と皮肉たっぷりに批評しています。「使徒信条」がきれいな部屋であり、「ピラット」が一匹の犬であるかどうかは、皆さんの判断におまかせしますが、ピラットが登場する受難劇とか映画などでは、いかにも、悪賢い人物として登場しています。

ピラットに関する当時の記録には、「わがままな人物、粗野にして、対面を重んじる器量の小さい人物」とさんざんに酷評されています。一人の人物をここまで悪く言えるかどうかは、定かではありませんが、それほど悪名高い「ピラット」の名前を使徒信条の告白の中にとどめたのは、やはり、それなりの理由があつたのでした。

一つは、すでに申しましたが、主イエスの御苦しみと十字架とは、ローマの地方総督ポンテオ・ピラットのもとに起きた実際の出来事でありました。彼は、AD26年から36年の約10年間、ユダヤとタマスのローマの地方総督であつたからです。

もう一つあります。「地方総督ピラットのもとに苦しみを受けた」とするより、「大ローマの皇帝・カエサル・ティベリウスのもとで苦しみを受けた」とするほうが、はるかにふさわしいと思われます。しかし、あくまで、ユダヤの地方総督「ポンテオ・ピラット」のもとでイエス・キリストは、苦しみを受

けた」としました。

「パックス・ローマーナ」といわれていた大ローマ帝国は、西はスペイン、東はバルト海に至る、広大な領域に、無数の植民地がありました。その数ある多くの植民地の中で、一番派遣されたくない任地といえれば、それは間違いないユダヤの地でありました。当時、「哲学」といえばギリシヤ、「法律」といえばローマ、「宗教」といえばユダヤといわれていました。ピラトは就任後、ユダヤの宗教的な問題に巻き込まれます。

ピラトが主イエスと対面したのは、彼の就任後、4年目とされています。

かくして、ピラトと主イエスとは対面することになります。少し見方を変えていえば、ピラトは主イエスの面前に引き出されたとも言えます。いすれにしても、出会うべくして出会った両者であります。ピラトの名は、こうして永遠に「使徒信条」に残ることになりました。

## (2)

ユダヤには、「サンピドリン」と呼ばれていた議会がありました。構成メンバーは、「長老たち」・「サドカイ派と呼ばれていた祭司長」・「パリサイ派と呼ばれていた律法学者たち」たち、総勢71人です。

エルサレム中を混乱におとし入れたイエスという人物に議会はアッロシと混乱していました。

イエスには、ユダヤ社会を混乱させた騒乱

罪の疑いがある。

それだけではない、ローマ政府に税金を納めるべきかどうかの問題を残しました。

なかでも、極め付きは、「自分はユダヤの王であり、メシアである」と言った、と疑われたことが最も致命的な問題でした。

福音書の中で、弟子のペテロが、「あなたこそ生ける神の子キリストです」と告白しましたが、しかし、主イエス自ら、「自分はメシアである」と公言した箇所はどこにも見当たりません。

もし、自らをメシアと公言すれば、ユダヤ議会で死罪と定められます。

ところが、議会が死罪と定めても、刑を執行する権限はユダヤ会議にあつません。

刑の執行をするのは行政の長ピラトです。ところが、ピラトは、ローマ植民地法というものによつて、「現地の宗教問題に関与してはならない」と定められています。

もし、自分の命令でイエスを処刑すれば、ローマの植民地法に反することになります。刑を執行しなければユダヤ会議と民衆に暴動が起こるかもしれません。板挟みとなったピラトは、大いに悩みます。

ヨハネ福音書18章28節以下から19章には、そのピラトの戸惑い、混乱ぶりが詳細に記されております。

ヨハネ18章38節。ピラトは、ユダヤ人のところに出ていって彼らに言った。『たたくしは、あの人には何の罪も認めませんで

った』。

さらに、ヨハネ19章4節に、『ピラトはもう一度外に出て来て、彼りに言った。……あなたに何の罪も見られないというところを、あなたがたに知らせるためです。』。

さらに、19章6節には、『祭司長や役人たちは、イエスを見ると、激しく叫んで、『十字架につけろ、十字架につけろ』と言った。すると、ピラトは彼りに言った。『あなたが

たが、この人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。』。

二度、三度とわたり、『ピラトは』この人には何の罪をも認められない」と認めています。「三度」といえば、シモン・ペテロが三度主イエスを否認した例を思い出します。

「三度」とは完全というところから、ピラトは、完全に、「この人には何の罪をも見い出せない」と認めていたのです。

大ローマ帝国から絶大な権限を与えられていたピラトです。ユダヤ会議も民衆が、いかにイエスを十字架に付けろと狂いわめようと、彼の一言で無罪放免にすることが出来たはずのです。

実際、ピラトの言葉のはしほしには、何とかイエスという人物を許したいの思いが伺えます。迷いに迷ってピラトです。

### (3)

人が犯す罪には、二つの側面があるといえます。一つは、「作偽的罪」です。もう一つは、自らなすべきことをわきまえていなが

ら、それをなさないという「なげねの罪」。

「不作偽の罪」です。台湾では、「見せぬの聞かぬ、言わぬ」に、もう一つ「なげぬ」を加えています。なすべき時にならない、言うべき時に言わない、このピラトの迷いに迷った彼の心は、本当に神を知らない人間の罪深さを思い起こさせます。

確かに、この時、ピラトは数々の重圧に囲まれています。

1つ目はユダヤ民衆の狂い叫ぶ声です。「十字架につけよ。十字架につけよ。」と狂い叫ぶ民衆が暴徒化することを恐れていました。

2つ目は、こつした事態を治めることができなければ、統治能力に欠けた、無能な地方総督といつレッテルを貼られます。

3つ目は、ピラトの奥さんの不安です。

マタイ福音書27章19節に、「あの義人は関係しないでください。わたしは今日、夢で、あの人のために皆さん苦しみました」と言う奥さんの存在です。そのため迷いに迷ったピラトは、「水を取り、群衆の前で手を洗って、『この人の血について、わたしには責任がない。おまえたちが自分で始末するがよい』と、民衆の求めに応じています。

讚美歌138番の3番の歌詞には、「とがなき神の子、とがをおえば、照る日も隠れて闇となりぬ」とあります。とが（咎）あるものが、とがをうけたというのなら分かります。ところが、とがなきものが、とがを

うけたのですから、これはもう「照る日も隠れて闇となりぬ」と言わねばなりません。

ヨハネの福音書における、主イエスとピラトの両者を比べる「ハ、ハ」はかかれているキリスト「ハ、ハ、ハ」と「ハ、ハ、ハ」の方向がほぼと惨めな立場にあるからです。

茨の冠を頭にかぶらせられたイエスを前にして「ピラトは」「ヘック・ホモ」「この人を見よ」「ヨハネの」と、謎めいた言葉を残しました。

「わたしの前にいる、惨めなイエスをよく見なむ」とでも言ったのでしょうか。その中ではないでしょうか。・・・では、何を見よと言ったのでしょうか。この人をよくよく見つめていなければ、どうしても、分らないことがあります。

自分は意志の弱い人間であるとか、はかない存在であるとか、能力のない人間であるとか、その程度のことなら、「この人」を見なくてもわかります。

「この人」「イエス・キリスト」をよくよく見つめていなければ分からないことといえば、それは、自分の罪がどれほどのものであるかが分からないことです。「この人」を見つめていない限り自らの罪に気づくことはないのであります。

パウロは、自分の内面では「ハ、ハ、ハ」キリストの内にも自分を見いだすことにしようと「ハ、ハ、ハ」(9:30)ですが、キリストは「万民の鏡」なのかもわきませません。

キリストを見つめていないと、自分が良い人間か、悪い人間かが、分からなくなりません。大体、自分の罪というものは、ただ、自分の中を覗き込んだだけでは分かるものではありません。

(4)  
キリスト教の話しを聞くとは、キリストの偉大さ・立派さを聞くことにあると思いかもしれません。また、ある人は、アツト驚くような奇跡シヨウを見せつけられて、キリストを信じさせようと思われるかもしれません。

ところが、ポンテオ・ピラトが「この人を見よ」と指さした時のイエスには、この世の威光もなければ尊厳もありません。裸とされ、茨の冠を被せられ、荒縄で両手を縛られ、唾(つば)せられ、ゴルゴダの丘の十字架で処刑されようとしていたイエスです。

申命記21章22-23節に、「木にかけられた者は神にのろわれた者」とあります。主イエスが十字架という木に架けられた意味は、「神にのろわれた者」の証しでありました。

罪なきお方が、神の呪い(のろい)を総身に受けて、十字架につけられようとしている、何のためにか、誰のためにか、それは「わたしのため」・「あなたのため」ではなかったか、主イエスの十字架は、「身代わりとしての死」とあると説明を

れてきました。「喜ばしき交換」ともいわれてきました。喜えれば喜えるほど、そう安易に喜べない事実です。

ピラトがいびかざるほど、最後の最後まで、弁明も、弁解も、反論も何一つせず、終始沈黙したままのイエスに、ピラトはついに「あなたは、ユダヤ人の王であるか」と尋ねたのです。

「はい、イエスは、」あなたがそう言うのは、自分の考えからか。それともほかの人々が、わたしのことをあなたにそう言ったのか」と再度問えば、ピラトは、「あなたはいったい、何をしたのか」。

イエスは答えられた、「わたしの国はこの世のものではない。もしわたしの国がこの世のものであれば、わたしをユダヤ人に渡さないように戦ったであろう。しかし事実、わたしの国はこの世のものではない」。

そこでピラトは、イエスに言った、「それでは、あなたは王なのだ。」「すると、イエスは答えられた、「あなたの言うとおり、わたしは王である。わたしは真理についてあかしをするために生まれ、また、そのためにこの世にきたのである。だけれども真理に立つ者は、わたしの声に耳を傾ける」。

その時です。ピラトは「真理とは何か」といびかし気にいいながら、「私には、この人に何の罪も見いだせない」(ヨハネ8:33)と云いました。

私達が、「ポンテオ・ピラトのせむじむに背く

みを受け」と使徒信条で告白する時、ピラトだけでなく、私もまた、罪のないお方を十字架に引きわたしました、ということを中心に念じて告白するものでありたいと思います。

ヘンデルの「メサイヤ」で「キング・オブ・キングス」と讃美する箇所にはしかかると、イギリス国王は最高の敬意、「スタンディング・オベイション」をする習慣があるといえます

最後に、テモテ第一の手紙の章13節を讀んで終わります。

「私は、すべてのものを生かしてくださる神のみ前と、またポンテオ・ピラトの面前でろっばなあかしをなされたキリスト・イエスのみ前であなたに命じる。私達の主イエス・キリストの出現まで、そのいましめをけがすことなく、また非難のないように守りなさい」。

【祈ります】

天の父よ、今朝は、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受けられたイエス・キリストに目をとめました。このお方を見つめていないと自分の罪が何であるかが分かりません。わたしたちは受難節(レント)を迎えています。今週も主イエスの御苦しみ思いを潜めて、日々過ごすものとなりしめてください。

主イエス・キリストの名により祈ります。

「アーメン」。